

学生時代と図書館 49

— 人生を変えた一冊の本 —

上野 義和

これはもう、私にとっては衝撃的な本だった。中橋一夫著『道化の宿命』、出版されたのは1948年。当時、大学3年生になったばかりの私は、この本を読んで、将来の人生に対する見方が大きく変わった。

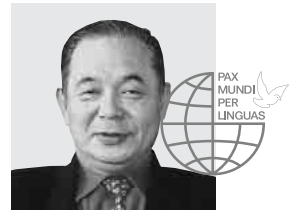
人にはそれぞれ人生に影響を受けたものがあると思う。そのものが「人」であったり、「映画」であったり、また「音楽」であったり、人によって異なるだろうが、私にとっては、この古い出版の一見何ということもない質素な装丁の本こそが、まさにそれだった。

実のところ、その本に出会うまでの私は勉学とはまるで縁遠く、文学部英米語英米文学科に入学してはいたものの、高校から続けて硬式野球部に属し、毎日登校するのは只々春・秋の公式リーグ戦で出来るだけ多くの勝点をあげるための練習に参加するためだった。当時はスピードガンなど無い時代で、投手としての自分の力量がどの程度であったかの客観的な数字は不明だが、打者の手元でホップする速球（今で言う、ツーシーム）とフォークボールが結構有効で、1回生から度々リーグ戦で登板していた。しかし、試合に負けると上級生から課される1、2回生の半日ランニングとうさぎ跳び、それも水分補給なし、という理不尽が罷り通るピラミッド型の封建制に疑問を感じ始めると同時に急速に野球への興味を失い、2回生の冬に退部した。スポーツは楽しくなければいけないと、つくづく思う。加えて、スポーツに充たる英単語sportはdisport（気晴らし、娯楽の意）の弱音の頭部消失により誕生した語なのだから。閑話休題。

さあ、これから勉強するぞ、という意欲は湧いてきたものの、2年間のブランクを埋めることから始めねばならない。そこで出かけて行ったのが図書館であった。古くて厳（いか）めしい建物で、何とも入りにくい雰囲気ではあった。内部の照明度は低く、カウンターの向う側の職員が無表情な顔でこちらに視線を向ける。何十年も昔のことな

のに、まるで昨日のように記憶が鮮明なのは、おそらく教員になって訪れた日本の国公立大学の図書館で感じた同じような雰囲気が意識の中に定着したからではないかと思う。付属図書館が大学の権威や威厳の象徴であった時代のこととして仕方のないことだったと思うが、現代のコンピュータ主流の図書館はそうであってはならない。明るく、誰でも気軽に入れてこそ、サービス機関としての図書館の存在意義があるのだから。イギリス、アメリカ、オーストラリア等の大学へ客員教授として行くたびに思うことは、付属図書館は学生の勉強部屋や書斎の代りになっている、つまり学生の生活の一部になっていることである。日本と異なり、彼らは本を買って自宅に書斎を作ることをしないのである。

本題に戻り、書庫に入る許可をもらった私は英語学、英米文学の書棚に奇妙な題の本を見つけた。これが『道化の宿命』との最初の出会いであった。借り出したその日、徹夜で読み通した。もう一頁、もう一頁と止まらない程面白く、文学鑑賞の一方方法を教わった気がした。内容は米作家メルヴィル作『モビー・ディック』（和題『白鯨』）と英劇作家シェイクスピア作『ハムレット』という、一見何の繋がりもなさそうな二作品がまるで推理小説の謎解きのように明らかにされ、次第に一本の糸のように繋がっていくものである。文学とはこんなに面白いものなのか、という強烈な衝撃が「文学は難解」という先入観を吹き飛ばしてくれたと同時に学問の面白さ、楽しさを伝えられる職業への方向づけをしてくれる結果となった。一つの対象物でもさまざまな視点があること、人生の指針を与えてくれたこの本に感謝しながら、月一度読ませてもらっている。



うえの よしかず（図書館長／教授・英語学）